

(やばい、遅刻しちゃう……!)

慌てて階段を駆け上がる。

朝、着替えに手間取って講義に遅れそうになってしまった。

予備校だから遅れても何かあるわけではないけれど、冒頭を聞き逃してしまうとその後が分からなくなりそうで不安だ。

あと少しで教室のフロアに着く、というところで——爽やかな声で名前を呼ばれた。

「瑠夏さん瑠夏さん、待って。ペン落ちたよ」

「あ、あつ、廣瀬先生……!　ありがとうございます……っ」

講師室のある、ひとつ下のフロアから階段を登ってきた廣瀬先生が笑顔でボールペンを渡してくれた。慌てて受け取って頭を下げる。

「そんなに急いで階段登ると危ないって。瑠夏さんがいつも真面目に講義受けてるの知ってるし、ちょっと遅刻したくらいで俺怒んないから。ね」

「は、はい、気をつけます、ありがとうございます……！」

柔らかな笑みが眩しくて直視できない。

うつむいたままお礼を言って、急いで教室へと入った。

後ろ姿をじっと見られていた気がしたけれど、気にするわけにはいかない。皆に大人気な廣瀬先生を、私なんかが独占してはいけないから。

陽キャの

モテモテハイスベック

イケメン教師に

秘密がバレて襲われ
快楽堕ちかと思ったら

甘イチャ
えっちな
お勉強♡

させられてクリイキも
中イキも覚えちゃった話



ろくもくろくろく

絢辻透

「あれ？ ヒロ先また髪明るくなつたー？」

「色抜けただけだつつの。ほーら、静かに！ 前回の続きやるから76ページ開けー」

私のすぐあとに続いて入ってきた廣瀬先生に、いつもの黄色い声が飛ぶ。仕方なさそうな苦笑いもどこか爽やかだ。

慌てて座って参考書とノートを開きつつ、廣瀬先生を盗み見る。

「全然関係ないページ開いてる奴いんなー、佐藤さん？ 前回何のことについてやつたっけ？ ははっ、そうそう、モル比熱ね。ちゃんと覚えてるね」

見た目はまったく講師らしくない。

俳優さんみたいな整った顔立ちだけれど、薄く紫がかったライトグレーの髪に、耳にはピアスも光っている。一見すると繁華街にいるチャラめのお兄さんみたいだ。

私たち予備校生よりは年上だけれど先生としてはかなり若くて、なんでそんな人が予備校の講師なんかやっているんだろうと常々思うけれど――……

でも、そんなことはどうでもよくなるくらい、廣瀬先生の授業はわかりやすかった。

（学校じゃ全然分からなかったところも、廣瀬先生が教えてくれた後に問題解くと、できるようになってるんだよね……）

両親の希望でランクの高い大学を受験したものの、見事に惨敗。

春から評判の良い予備校に通うことになって、廣瀬先生の授業でようやく活路が見出せてきた。この調子で頑張れば、次は受かりそうだ。

希望を胸に抱いて、参考書に向き直ったのだが——……。

（はあ……最後のところ、難しかったな……）

一時間後、私は参考書と睨めっこをしていた。

よく読んでみても、自分の理解であっているか分からない。いつもこうだ。覚えたら忘れないタイプではあるけれど、すぐに理解することができない。

質問、したいけれど……

「ヒロ先ー、ピアスどこで買ったん？ あたしもこういうのにしたい」

「やたら見てくんなって思ってたけど、そんな事考えてたわけ？ 授業に関係ない質問は受け付けてねえっつの」

えー、という不満の声が聞こえてくる。少し待ってみたけれど、囲まれていて無理そう
だ。

仕方ない。今度、個別指導の予約を取ってあるから、その時に聞こう。

そう思って次の講義の準備に取り掛かっていると――

「瑠夏さん、瑠夏さん。俺になんか聞こうとしてた？」

「えっ」

思わず瞬きをして上を向くと、気付けば他の生徒たちから逃れてきたらしい廣瀬先生が目の前に座っていた。

まさか気付かれているとは思わなかった。そんなに分かりやすい態度をしていただろうか。

慌てていると、首を傾けて顔を近づけてきてより心音が跳ねる。

「様子見るみたいな感じで、俺のこと見てたから。聞きたくて待ってたかなーって……勘違いだった？」

「あ、いえ、質問したいことは、あって」

「ホント？ 良かった、勘違いだったらめっちゃ恥ずかしかったからさ。講義でなんかわからないとこあった？」

「は、はい……あの……」

質問しながら、廣瀬先生の顔を盗み見る。

少し猫っぽく釣り上がった目尻と綺麗に通った鼻筋に、見惚れそうになるのを必死に堪えた。

「そうだよ、あってるあってる。実際は温度や圧力も依存すんだけど、受験の時は定数として扱われるってことね。俺の説明わかりにくかったよなー、でもちゃんと理解出来てんね、瑠夏さん」

「いえ、廣瀬先生の説明はいつもとってもわかりやすいです……！ 私が高校の時みたい
に、間違えたまま進んじゃったら、と思つて」

「瑠夏さんが間違えたことあつたっけ？ いつも丁寧に聞いてくれてて、頑張つてるでしょ」
「それは、廣瀬先生の説明だと、わかりやすいから……」

参考書を一緒に見ていた廣瀬先生が柔らかく目を細め、はにかむように笑う。

こんな顔をされたら皆が騒ぐのも当たり前だよなあ、なんて思いながら参考書を閉じ
ると、不意に顔を覗かれた。

「瑠夏さんはさ、ゆっくり飲み込むタイプだよね」

「へ……？」

「何回も咀嚼して、ちゃんと一個一個覚えてから進む……つていうか。結構皆、テストで出
るところだけ……とかなりがちなんだけど、瑠夏さんは違うよね」

「そ、そうなんですかね……自分だと、覚えが悪いなあつて」

「それは瑠夏さんがちゃんと覚えてから進もうとするからでしょ。そういうの、勉強にすご
い大事な要素だと思うよ、俺は」

嬉しくて恥ずかしくて、顔が熱くなる。

こんな風に、いつも気にしていたことを掬うように言われるのは狡いと思う。モテるのも当然だ。

けれど本人は無自覚なのか、騒がれるのに困っているようだし……私だけは勘違いしないようにしなければ、と唇を噛み締める。

「ありがとうございます、人よりは、だいぶゆつくりになっちゃうんですけど……」

「いいんだって、自分のペースで着実にやってこうな。俺も出来る限りのことはするから、一緒に頑張ろ、瑠夏さん」

励ますような言葉が心に染みる。

緩んでしまう口元を隠すようにぺこりと頭を下げると、廣瀬先生はまたあの爽やかな笑みを見せて、講師室へと戻っていった。

（……でもやっぱり、私だけ名前で呼ばれるのは、ドキドキしちゃうな……）

別の時間の生徒に苗字が同じ人がいるらしく、最初に会った時に名前で呼んでいい？と聞かれて、以来ずっとこの教室では私だけ名前呼びだ。

なんだか特別扱いみたいでついつい、心の中で嬉しがってしまう。

——本当に、勘違いしないようにしなければ。



「……は！？ うそうそうそ、ちょ、瑠夏さん大丈夫！？」

「はい、すみません、ちょっとここで拭かせてください……」

個別指導の日。

予備校に行く道中、突然の予報にない豪雨に遭ってしまった。

ただ予備校に行くだけだと思っていた私のバッグの中に傘が入っているはずもない。走っ

てきたけれど、あまりの豪雨でまったく意味がなかった。

びしょびしょのまま入口でハンカチを取り出して滴る水を拭いていると、気が付いた廣瀬先生が焦った声をかけてきた。

（……ちよつと、気まずい……）

——この間から気になっていたことだったのだけれど、私にはある「秘密」がある。

普段から気を付けているつもりなのだが、バレるとかなり気まずい。あんまり見ないでもらいたいな……と思っていたのに、焦ったような顔をした廣瀬先生に腕をそつと取られてしまった。

「えっ?」

「……瑠夏さん。ちよつと、来て。タオル貸すから」

いつもより硬い口調に驚く。軽く腕を引かれるまま、小さな準備室へと連れて行かれた。窓のついたドアから廊下の様子を確認した廣瀬先生は、急いだ様子で鍵を掛け、奥のロッ

カーへと向かう。

部屋が濡れてしまうと思つて入口からあまり動けずにいると、先生はすぐにロッカーからタオルを取り出して肩にかけてくれた。

「急にごめん、これ貸すから使つて。……瑠夏さん、あのさ」

目線をうつつかせながら言いにくそうに口を開く廣瀬先生に、もしかして……と嫌な汗が流れる。

すると、ドアの向こうから明るい声が聞こえてきた。

「廣瀬せんせー、ヒロ先〜どこー?」

「うわっ!?!? ちょ、待つて待つて、こっち来て……!」

焦りの滲む潜めた声と共にまた腕を取られ、奥の方へと引つ張られる。

雨模様様の空の、ぼんやりとした光が差すだけの部屋の隅へと連れて行かれてしまった。思わずタオルを握つて縮こまっていると、目の前に焦った顔の廣瀬先生がドアから私を

隠すように立つ。

「廊下で騒ぐな、廣瀬先生は個別指導中だ。お前もう終わりだろう、早く帰れ」
「えー？ 聞きたいことあったのにい」

他の先生が対応してくれたようだ。話し声が遠ざかっていく。
ほっとしたのも束の間、大きな安堵の息が聞こえた。

「はー、焦った……良かった、見られなくて」
「すみません、あの、私……もしかして……」

ドキドキと心臓がうるさい。でも、この状況は多分、そういうことだ。
恥ずかしさを堪え、うつむいたまま口を開く。

「す、透けちゃって、ましたか……？」
「あー……、……うん」

照れたように目線を逸らし、頷く先生を見て、一気に顔が赤くなる。

私の秘密。それは、普段の地味な服装には合わない……露出の高いセクシーな下着を着るのが趣味、ということだった。

「こないだから気になってた、っていうか。階段上ってる時に……ほんとごめんんだけど、スカートからちらって紐が……見えちゃって」

「ひえ……」

「それで今日、濡れてたからちよつと透けちゃって……うん。可愛いけど、危ないから、さ」

「ううっ、ごめんなさい……違うんです……」

改めて言われて、恥ずかしさで死にそうになってきた。

力が抜けて、ずるずるとへたり込んでしまう。先生はそんな私を気遣うように膝をついて、目線を合わせてくれた。

——本当に、ただの自己満足だった。

小さな頃からずっと、親に派手な格好をしないようにと言われてきて、服も下着も黒や灰色の地味なものばかり。

でも本当はずっと、もっと可愛くて華やかな服が着てみたかった。

それで下着ならバレないだろうと思って……華やかなフリルやレースのついた下着をお小遣いを貯めて買って、洗濯も自分でやって、こっそり着るのが趣味だった。

「——な、なので……本当に趣味というか、自己満足で……誰かのためとか、そんなんじゃないんです……っ！ すみません、変なもの見せちゃって……」

「……そっか。そういうこと、だったんだ……」

体育座りでぼそぼそと事情を話すのを静かに聞いてくれていた廣瀬先生が、独り言のように漏らす。

少し驚いた。いつもの先生なら、趣味は人それぞれだから俺は良いと思うけど、外に出る時は気を付けてね——とか、そんな風に諭しそうなもののなに。

不思議に思っ顔を上げると、先生は悩ましげに少し眉を寄せて、じっと私を見つめて

いた。

——どうして、そんな顔をしているのだろう。

「個別指導の時ってさ。生徒が可愛い服着てきたり、いつもより露出多かったり……とか。たまーにだけど、あるんだよね。ごめん、俺、もしかしたらそういうやつなのかな……って思っちゃって」

「ひ、廣瀬先生ならそうですね……ほんとに、そういうのじゃないんです、すみませ」
「ううん。他の生徒にはちゃんと、ダメだよ、って言うんだけど、ね。なんでだろう……」

廣瀬先生の手が伸びてきて、タオルで濡れた髪を拭われる。

曇り空の薄明かりに照らされた廣瀬先生の顔は相変わらず格好いいけれど、ほんの少し憂いを含んでいた。

「——俺いま、溜夏さんに、そんなんじゃないって言われて、ガッカリしてる……」
「……え……っ？」

掠れた声が背筋に響く。

講義の時みたいな、明るくて遠くまで届くような声とは違う。私にだけしか届かない、独り言みたいな寂しげなトーンだった。

優しく水滴を拭く指が、タオル越しに耳に触れて、首筋までも拭われる。

「……暗い色の服だから平気だと思った？ でもほら、こんなびしょびしょになっちゃったらさ……これ、なんて言うんだろ、コルセット？ みたいな……胸、ぎゅーって寄せるみたいな紐ついてるブラ、見えちゃってるんだよ……」

「え、あつ、ご、ごめんなさ……っ」

「可愛いデザインだよね。俺さ、これ……もしかして俺のため？ とかって、一瞬喜んじやつた……」

「そんな、つもりじゃ……ひやつ、せん、先生……は、恥ずかしい……！」

混乱が止まらない。熱を含んだ吐息と共に、濡れたシャツへとタオルが押し当てられた。あまりに恥ずかしくて顔を隠しながら、もぞもぞと抜け出すように身を振る。

——それが、よくなかったのだろうか。

「ねえ。駄目だって、そういうの」

「へ——あつ、あ？　せ、せんせ、なに、」

「分かってやってんの？　えっちな胸元丸見えで顔隠して、イヤイヤしちゃって……正直、めっちゃくちゃ可愛いからね。逆効果だよ……？」

冷えた膝に手を添えられ、あつさりと足を割り開かれてしまった。

開いた足の隙間に、先生の身体が潜り込んでくる。密着したら先生のスーツが濡れてしまふのに、それも厭わないとばかりに近くに迫られて、沸騰するように身体が熱くなる。

「せ、先生……ほんとに恥ずかしい、から……っ」

「こんな濡れて透けちゃってるのに、今更？　ね、もうちょっただけ見せてよ、瑠夏さん。俺、瑠夏さんがどういうの着てるのか、ちゃんと見たい……」

どうしよう、と思っている間に……♡と、薄手の上着が肩から落ちる。

廣瀬先生は張り付いたシャツの中へと手を潜り込ませながら、鼻先が触れ合うほどの距

離で私を見つめてきていた。

(恥ずかしい……こんなところで、先生にえっちな下着着てるの、見られちゃうの……絶対、だめなのに……っ)

そう思うのに、身体は言うことを聞かない。

いつも一人で、鏡の前で満足していたからだろうか。廣瀬先生に……見てもらうのを、心の片隅で喜んでしまっている、ような。

そう思った瞬間、間近に迫る先生の顔を直視できなくなって、きゅつと目を閉じた。

「……あーもう、マジで……ズルいつて。可愛すぎ……」

「ひゃ……うう……っ」

普段聞くことのない、少しイライラしたような口振りに喉が引き攣る。

そのまま、とうとう濡れたシャツを捲られて——直接、下着を見られてしまった。

「あー……やっぱり、ちょっと大人っぽいやつなんだね。絞った紐の間から谷間見えてんの、エロ可愛い……」

「あ、あんまりじっくり見ないでくださ……ひゃっ!?!♡ あつ、だめ、せんせ……」

あまりの恥ずかしさに顔を背けていると、ちゅ♡と、鎖骨の下に唇を押し付けられてしまった。近付く頭からふわりと、ワックスの爽やかな匂いがする。

慌てて先生の肩を掴んだけれど、全然止めてくれる気配はない。

ちゅ、ちゅ、と柔らかく胸元に唇を押し付けながら、濡れた太ももを擦るように撫でられて、ふると身体が震えた。

「……ね、瑠夏さん。下もお揃いなの?」

「えっ、あ、お……お揃い……ですけど、あつ待つて、先生、恥ずかし……っ」

「ほんとだ、パンツも可愛い……けどやっぱ、危ないね。スカートなのに、こんな布ちっちゃいパンツ履いてたら、さ。ほら、こうやって……」

「ひゃっ、せんせ、くすぐったい……!」

すり……♡

足の付け根を柔く撫でられて擦ったさに身を振る。

恥ずかしいし逃げたいけれど、後ろは壁だし、追われるように首筋へと唇を押し付けられてしまっただうすることもできない。

「悪い大人に見つかって、手、出されちゃうんだよ……ん、ちゅ……っ」

「ひ……っ!?　だめ、まって、せんせ、くっっ!?♡」

ちゅ♡　ちゅううっ♡

すりすりすり……♡

耳元を一際強く吸われるのと一緒に、付け根を撫でていた指が下着へと伝って——割れ目を、柔らかくなぞる。

「あ……他のところは濡れてて冷たいのに……ここだけ熱いの、エロいって……」

「ひ、ん……っ♡　や、せんせ……そこ、触っちゃだめ……♡」

薄いサテンの生地を廣瀬先生の綺麗な指が辿っていく。こんなの駄目だって思うのに、触られたところから腰にぞくぞくした疼きがたまってきた。もう。

いやいやと首を振るほど、先生は興奮したように熱っぽく頬を上気させて、私の……おまんこを、下着越しに何度も、すりすり♡ すりすり♡ と繰り返して擦ってくる。

「だめ……？ 瑠夏さん、ほんとに？ 目うるうるさせて、息も短くなってきた……俺が今触っているとこも、ヒクヒクしてて……。こんなに嬉しそうなのに、俺に触られるの、ほんとに、だめ……？」

「あ、くっくうう♡ せ、せんせ……え♡ほんとに、へんな声、出ちゃうから……くっくうん、う……っ！？♡」

ちゅ……っ♡

すりすり♡ カリカリカリ……♡

堪えようと俯きかけた途端、先生の顔が近づいてきて——柔らかく唇同士が触れ合った。驚く暇もなく、一際腰がヒクつくところを見つけられて引っ掻かれてしまう。

(あ、あ♡ だめ、キス……はじめて、なのに♡ 私のファーストキス……えっちなこと、されながら、奪われちゃった……♡♡)

「ん……ね、こうやって塞いでたらさ、声出なくて済むよね？ だからさ、俺といっぱい、キスしよ……？」

「んむ、う……っ！？♡ ら、め、んんっ♡ せん、せ、くっく……っ♡」

ぢゅ……っ♡ ちゅむ♡

こりこり♡ こすこすこす♡

角度を変えて唇を吸われ、頭がぼーっとする中で、擦られるほど気持ちよくなってしまうところを何度も何度も撫でられる。

恥ずかしくてたまらないのに、おまんこがヒクつくのを止めることができない。

「ね、瑠夏さん……ここ好きでしょ。クリトリス、気持ちいいんだ……？ 撫でると顔とろけちゃってるのに、おまんこはヒクヒクしてて……ほんと、えっちなで、可愛い……」

「ふぁ……？ あっやあ、あっ♡ せんせ、やだあ、えっちなこと、言わないで……♡」

「なに、えっちなこと言われると興奮しちゃう？　瑠夏さん、こんなところで襲われて、えっちなこと言われて興奮してるんだ……ああ、可愛い下着もほら、濡れてきちゃってるじゃん……」

ぬりゅん♡　ぬるる……♡

こりゅこりゅ♡　ぬりゅぬりゅぬりゅ♡

割れ目からじんわり滲んでしまったらしい愛液をまとった先生の指が、ぴくぴくと反応するクリトリスをいい子いい子♡　つてするみたいに撫でてる。

あまりの気持ちよさに鼻にかかった吐息が漏れて本当に恥ずかしい。

（だめ、何回もキスされながら、ぬるぬる撫でられるの、きもちいい♡　こんなの駄目なのに♡先生やめて、つて言わなきゃいけないのに♡　きもちよくて、あ♡　ぬるぬるの爪でカリカリするの、むり♡　嬉しい嬉しいって、腰、浮いてきちゃう……♡）

「は……、ふあ、んんっ♡　やあ、せんせえ、それ、やあ、っあぁ♡」

「やーじゃないでしょ？　クリカリカリされんの、気持ちいいんだよね？　ほら、どんどん

ぬるぬるになってきてる……瑠夏さんのまんこ、喜んでるの丸わかりだよ……♡」

カリカリ♡　ぬりゅ♡　ぬりゅゝゝっ♡

付け根から何度も撫で上げられては引っ掛かれて、溢れる愛液がお尻まで伝ってきている。かくかくと勝手に腰が揺れてしまうのも止められない。

「は、へ……っ♡　っあう、う、らめ♡　も、やら、せんせえ♡　も、も……きもちいいの、やめ、っづうう……っ♡」

「……や、無理だって。そんな舌っ足らずでイヤイヤされて、止められるわけ、ないでしょ……？」

興奮したような先生が私を抱きしめて、さつきよりも激しくこりゅこりゅ♡　とクリトリスを摘んで抜く。火花が飛ぶほど気持ちいい。

ひ、ひ、と引きつったような声と共に短く息が漏れる。それを塞ぐみたいに、上から深い口付けが襲ってきた。

「んむう……っ♡　　ゝゝっふ、んんっ、っ!?!♡　んあ、あっだめ、きちやうっ、せんせ、おかひ、ダメえ、っあ、ゝゝゝ……っ、……っ♡♡」

びくっ♡　　びくびくびくっ♡

とろおゝ……っ♡

息が出来なくなるのと一緒に、激しく身体が震える。一際愛液が零れて、もはや床を汚してしまいそうな中、私は深い絶頂感に何度も身体を震わせていた。

——うそ、私……イッちゃった……♡

「俺とキスしながらイっちゃったの？　溜夏さん……。あー、すっご……ほとんどレースだから、愛液とろとろ零れちゃってる……美味そ……」

「は、へ……っうう、みないで、っあ!?!　やつ、やつ、ほどいちゃ、っひいん♡」

欲情しきった声の先生に、いったばかりのおまんこをじっと見つめられながら、下着の紐をするりと解かれてしまった。

弱々しく抵抗する身体を抑えられ、腰を抱かれて持ち上げられる。

慌てて身を引こうとするけれど、余韻にくたりと力の抜けた身体が言うことを聞かない。先生がすん、と鼻を鳴らして、——待って、絶対だめ、って思った瞬間だった。

——れろお……♡

「ひゃうづっ!?!♡ せんっ……せ、らめえ、つやあ、♡ らめ、ええ……っ♡」

「ん、は……こんなあつつくてぐちゃぐちゃのまんこ、そのままにしとくわけにいかないでしょ。それとも溜夏さんは、この可愛いパンツからマン汁とろとろ溢れさせたまま俺の講義受けちゃうような、変態さんだったの……?」

「……つやあ♡ あ♡ へん、へんたいじゃ、にやつ、あん♡ つすっちゃ、やつあ、♡」

ぢゅ♡ ぢゅるるる♡

れろれろれろろ……っ♡

まだ痙攣の収まりきらないクリトリスに吸い付かれて息もできない。先生の熱い舌が愛液を掬うように割れ目を撫でて、それだけで腰がまた浮いていく。

(むり、これ♡ イったばかりで敏感なとこ、舐められて♡ きもちいいのまたくる♡ やだやだ♡ 吸われて皮、むかれたクリ♡ 舌先でちろちろ撫でるの、むり……っ♡)

「はひ、ひいん♡ やら、さきっぱ、だめ、せんせえッ♡」

「ん♡ うんうん、先っぱ好きだね、いっぱいしてあげる……ちゃんと教えてくれんの可愛い、瑠夏さん……」

「ち、があ、っうあ♡ あ♡ だめ、きもち、よすぎてッ、っひ、うづ……♡」

ぢゅう……っ♡

こりこりこり♡ こりゅこりゅこりゅ♡

吸い付く唇が離れてくれない。ずっとずっと気持ちいいのを送られ続けて頭がばちばちする。屈んで私のおまんこに顔を埋めている先生に向けて、腰がへこへこ♡ と犬のように揺れてしまう。

恥ずかしい。どうしてこんなことになっているか、ちっともわからない。それなのに。

(うう……気持ち、い……っ♡ ダメこれ、ダメになっちゃう♡ 先生見る度、おまんこ舐められたの思い出して♡ 教室でおまんこ濡らす、変態になっちゃうう……♡)

「んっ……はは、なーに、どうしたの？ 俺のことじーっと見て。すっごいえっちな顔……もっとしてして♡ ってしてる？」

「……ちが、あんっ♡ あっ♡ だめ、も、こんな……おもい、だしちゃう、から……っ♡」
「何それ、可愛い……俺にこうされたの思い出しちゃうから、ダメなの？ ほーんと、煽るの上手すぎ……いいよ、何度でも思い出してよ……」

ぬりゅんっ♡

ぬぼ♡ ぬっぼ♡ ずにゅゅっ♡

囁きと共に、舌先をおまんこの入口に差し入れられてしまった。浅いところを何度も抜き差しされて言い知れない快感が腰に響いていく。

「あああ……っ♡ やめ、え♡ せん、せえ、らめ、も、おまんこ、やらあっ♡ も、おまんこ、しないでえ……っ♡」

「ふ……おまんこやだなの？ かーわいい……あんまこういうの慣れてなさそうだもんね、瑠夏さん。大丈夫だよ、ほら……おまんこ気持ちいい、でしょ？」

ぢゅむ♡ れ〜っ♡ れろ〜っ♡

気持ち良すぎてつらい。必死に首を振っても全然やめてもらえない。クリトリスを飴玉みたいに舐められているうちに、腰からまた絶頂感が忍び寄ってきてしまった。

（あ、あ♡ だめ、きもちいい♡ こんなすぐ、またイっちゃったら♡ だめになる♡ 癖になって、戻れなくなっちゃう♡ こわい、よお……っ♡）

「っは、ひい……っ♡ 〜っせんせッ、も、もお♡ ううっ、こわ、こわいい……っ」

「ん……どうしたの瑠夏さん、痛い？」

「いたく、ないけど……っひ、うう……っ」

ひくひくと喉を鳴らす私に気付いた先生が、口元を拭いながら起き上がる。やつとやめてもらえたことに安心して思わず手を伸ばすと、引き寄せられてぎゅっと抱きしめられた。

小さな嗚咽を漏らしながら擦り寄ると、優しくぼんぼんと頭を撫でられる。

「……ごめんね、怖かったな。瑠夏さんが気持ちいいのでいっぱいになってるところ、見たくてたまなくなっちゃった……」

「……つ、ちが、くて……っわ、私……」

髪を梳くように撫でながら沈んだトーンで言う先生に首を振る。先生が怖かったとか、そういうわけじゃない。すごく驚いたけど、でも、怖くなっただのは……そうじゃなくて。

「き、気持ち良すぎて……っ」

「……え？」

「このまま、またイっちゃったら……癖になっちゃいそうで、こ、怖くなって……」

「は……？」

先生が目を見開く。快感で蕩けていた頭が冷えてきて、じわじわ正気に戻ってきた。相当恥ずかしいことを言っている気がする。忘れて欲しい。すみません忘れてください……

と蚊の鳴くような声で謝った瞬間だった。

ふわりと、身体が浮いた。

「ひゃ……っ!? あ、あの、せんせ……っ」

「あのさ、ほんと、無自覚なのヤバいつて。……そんなの、煽るだけだからね」

ぶる……っ♡と背筋が震える。

先生の瞳が獲物を見つけたみたいないな鋭さでわたしを捉えていたからだ。

「癖になってよ、瑠夏さん。俺とこうしたこと、忘れられなくなつて? 一人でするときも、今日のこと思い出しながらして」

「……そ、そんな……だめ、ぜったい、っひゃうっ!?♡」

熱っぽい先生の言葉に唇を噛み締めた瞬間——べちっ♡と捲れたお腹に大きな何かが当たる。

それが先生の……お、おちんぽだつて気付く時にはもう、抱き込まれていて何も抵抗が

できなくなっていた。

「あ……っ？　せ、せんせ、だめ、これ……わたし、はじめてで、こわい、こわい、からあ……っ」
「ああ、初めてなんだ？　やば、嬉し……大丈夫、場所が場所だし、最後まではしないよ。
ただ俺と一緒に、気持ち良くなるの覚えるだけ。瑠夏さんなら上手に覚えられるよ、頑張ろうな……？」

一瞬怯えたのを安心させるように、こめかみへ、ちゅ♡　とキスされる。
どういうことだろう、と考える暇もなく、ぐつと腰を抱かれておちんぼがぬるぬるのおまんこのヒダを挟むように押し当てられた。

——ずりゅんっ♡

「あッ！？♡　な、びっ、あああっ♡　やつ、これ、こすれて、ええっ♡」
「あー、これ俺も気持ちいい……こうすると、さ。本当にえっちしてるみたい、でしょ？
ね、俺とえっちするの、こんな感じだよ、瑠夏さん……♡」

ずりゅ♡ぬりゅんっ♡

ゆさ、ゆさ、ゆさっ♡

そそり立って血管の浮いた先生のおちんぽと、私の濡れたおまんこがずりゅずりゅ♡と擦られて目眩がしそうになる。何度も揺さぶられ、裏筋でクリトリスを擦られて、気持ちがよくておかしくなりそうだ。

「はっ、ひいっ♡ あゝまた♡ またきもちいい♡ らめ、せんせ、これえ♡ これ、だめっ、うああっ♡」

「ふ……っ、癖になりそう？ いいよ、癖になったら毎日こうやってエッチしよ？ 溜夏さんのまんこが俺のちんぽの形覚えるくらい、どちゅどちゅハメてあげる……♡」

ぬりゅ♡ずりゅっ♡

ぱちゅっぱちゅっぱちゅっ♡

抱き込まれたまま揺さぶられて、肌のぶつかり合う音が狭い部屋に響く。

こんなの覚えちゃったら、絶対に駄目なのに。次第に本当にセックスをしているみたい

な感覚に陥って、縫るように先生に抱きついてしまった。

(先生の、おちんぽ♡ おつきくて、あ♡ 先っぽでクリくりゆくりゆされるのだから、きもちいい♡ もうだめ♡ わたし、先生に、きもちいいこと、覚えさせられちゃったんだ……っ♡)

「ひっ、ああ♡ うあ♡ こんな、も、わたし♡ おかひく、なっぢや、うう……っ♡」
「ん……♡ かわいい、一緒におかしくなる？ 俺もね、瑠夏さんに対してだけ、気持ち止まなくて……おかしく、なっちゃってるから……っ」

ずりゅん♡ ずりゅん♡

ぬりゅぬりゅぬりゅっ♡

吐息交じりの声が耳元に届いて、無意識のままおまんこがきゅん♡ と締まる。

その間も止まらない律動でクリトリスを擦られ続けて、一度は遠のいていたはずの絶頂感が戻ってきてしまった。

「あ♡ あ♡ らめ、せん、せえっ♡ やめ、っああ♡ だめこれっ、いぐ、またいつぢやうう……♡」

「俺のちんぽでクリシコられていきそう？ かーわいい……いいよ、瑠夏さんがいくまでこうやってずりゆずりゆ擦っててあげるからさ、可愛いいき顔見せて……？」

こっん♡ と額を合わせて甘く囁かれて頭が真っ白になる。

腰を抱きなおされて、上から突き上げられるみたいになりゆぬりゆ♡ ずりゆずりゆ擦られて、いよいよ堪えることもできなくなった。

「ああいく♡ せんせえ♡ らめ、いくっ、いっちやうう、あっ、あっ？♡ だめ、なに、やら、やらああっ、あ……っ……っ♡」

ぶしゅっ♡ びしゅっ♡

ぷしやあああ♡♡

いくのと一緒におしっこが出そうな気がして、慌てて腰を引こうとしてももう遅かった。びくびく震える身体を先生にがちり抑えられて、脳天に突き抜ける絶頂感と共におま

んこから何か溢れ出してきてしまった。

「あー、えつろ……素股されて潮吹きまでしちゃって……ほんと、たままない……」

「は、へ……っ？♡ ごめ、わたし、お、おもらししちゃっ……うう……っ♡」

いったあと先生がぬりゅん♡ ぬりゅん♡ と柔らかく擦ってくるから、ちよろろ……♡ と溢れてきてしまつて、恥ずかしくて涙が出てきた。

慌てたように先生が目元にキスをくれる。

「ああ、泣かないで？ 大丈夫、おもらしじゃないよ。溜夏さんがいっぱい俺で気持ちよくなってくれた証拠。すげえ可愛かった……」

「ん、ん……っ♡ でも、先生の服……汚れちゃって……」

「この状況で俺の心配してくれんの？ いい子すぎでしょ、ここに着替えあるからへーキ……って、うわヤバ、他の講師戻ってきちゃうじゃん……！」

ふと時計に目をやった先生がぎょとした顔をする。つられて時計を見ると、もう個別

指導の枠が終わる頃だった。そんなに時間が経っていたなんて。

慌てて先生の膝から退こうと立ち上がろうとすると、ぐつと何かを堪えたような先生に、また抱きしめられてしまった。

「わっ……廣瀬、先生？」

「あー、もつと触りてえ……。ゴメンね、俺、瑠夏さん相手だとなんか……。歯止め効かなくなっちゃうみたい」

「わ、私、相手……？」

「そ。ごめん、俺……瑠夏さんのこと、結構もう……。逃がしたくない、かも。ね、気持ちいいの、癖になった？」

「そ、そそそれは……っ」

ぼんつとまた顔に熱が灯る。

正直に言えるわけがなくて口を噤むと、こつん、と額をくつつけられた。

「ふ、恥ずかしくて言えないか。じゃあー……瑠夏さん、他にも可愛い下着、持ってるんだ

よね？」

「えっ、えっ？ えっと、も、もつては、いますけど……っ」

もごもごと答えると、笑った先生にまたキスをされてしまった。

まるで恋人を見るみたいな、どこか愛おしげな視線から目を背けられない。

「じゃあ次はもっと、ちゃんとしたとこ連れてくからさ、着てるとこ見せてよ。瑠夏さんが今まで誰にも見せたことない、とびきり可愛い下着姿、俺だけに見せて？」

「そ、そんな、わ……私なんかの、そんなとこ、見ても」

「瑠夏さんだから見てえの。ね、お願い……瑠夏さんのこと、ベッドでぎゅーって抱きしめていっぱい可愛い可愛いしたい……」

ぐつと喉が詰まる。こんな格好いい人にそんなことを言われて断れるわけがない。ただでさえ、あんな、癖になりそうなほどの行為をされたあたっていうのに。

「……は、はい、私で、よければ……っ」

小さな声で頷く私に先生は、花が綻ぶように笑って、もう一度キスをくれた。

——今思えば。

この時、ちゃんと断ればよかったのだ。

快感にのぼせた私はすっかり忘れていた。

廣瀬先生のことを好きな女の子はたくさんいるんだということ。

この時、ちゃんと断っていれば——……こんな苦しい思いをせずに、済んだというのに。